

平安時代

竪穴住居跡 8 棟・土坑 5 基を検出している。縄文時代から古墳時代まで窪地状の地形を示していた上位に礫層の堆積が認められる。その礫層を掘り込んで当該期の竪穴住居が構築されており、河川の流路が平安時代以前に変わっていることを物語っている。これまでの調査で 8 世紀中葉から 10 世紀前葉の集落の存在が明らかにされている。住居跡はいくつかのまとまりを示しながらも、調査区のほぼ全域に認められる。

江戸時代

遺構は検出されず、攪乱層から遺物（図版19）が出土している。遺物は陶器播鉢、磁器碗・皿・蓋である。肥前系碗は三角形に作り出す高台から 17 世紀前半の年代が想定される。当遺跡周辺は、最上氏時代山形城下絵図によれば「上ノ山兵部太浦下ヤシキ」周辺に当たる。少量の遺物であるが、山形城の城下町を考古学資料から解明する第一歩となる。

2 山形西高敷地内遺跡の複式炉

当遺跡からは縄文時代中期末葉大木 10 式期の竪穴住居跡が 78 棟検出されている。これまで検出された複式炉は 26 基であるが、住居の重複による破壊等を加味すると、数はさらに増えると思われる。構造は、土器埋設部、石組部、前庭部からなり、上原型複式炉を基本とする。

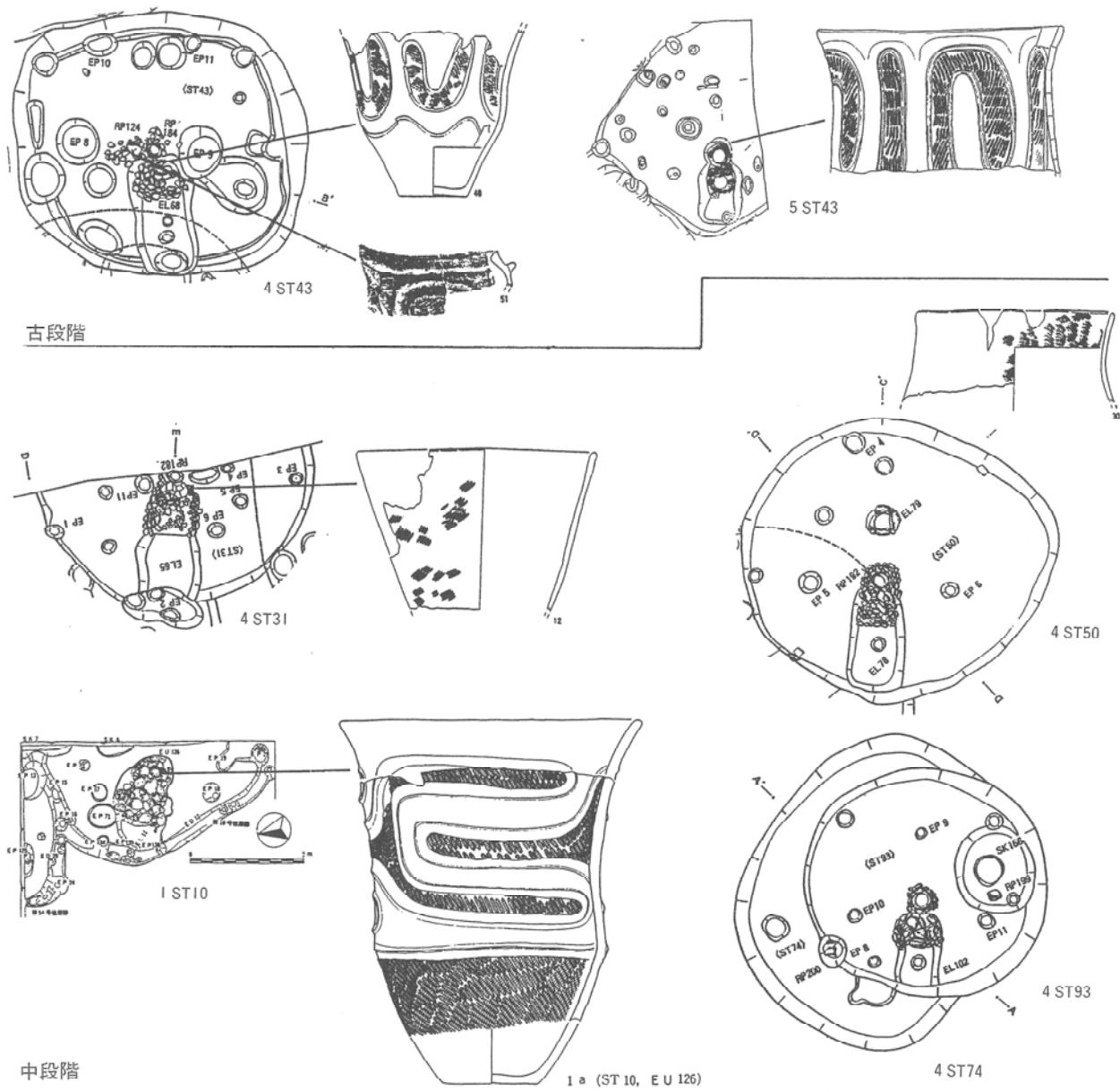
複式炉は、東北地方南部を中心に縄文時代中期末葉大木 9 式から大木 10 式期に盛行する。初現は大木 8 b 式から同 9 式の間とされ、縄文時代後期には再び単純小型化し地床炉・石囲炉に戻る。複式炉は、その特異な形態と共に、一気に拡大し消滅するその在り方に解明されない点が多い。当遺跡の縄文時代の集落は、複式炉の盛衰に重なるように大木 10 式期に収まる。限られた期間に営まれた当遺跡において、その変遷の分析は複式炉の機能や複式炉を必要とする生活の変化を理解する糸口になると見える。ここでは、大木 10 式期の古から新段階への変化を提示する。複式炉の時期については、埋設された土器に基づくが、転用されている可能性もあり、住居構築の時期との関連については検討の余地を残している。

古段階では、土器埋設部・石組部・前庭部が明瞭で平面形はダルマ形を呈する。石組部は丁寧な石組みが行われている。中段階になると土器埋設部と石組部が連続するようになり、前庭部が発達するものがある。この段階では丁寧な作りはまだ残されている。新段階になると石組部と前庭部の掘り込みが伴わないもの、前庭部が壁から離れ小型化しているものが出現する。石組部の残っているものは、石組とは言い難い粗雑な状況である。古から新段階の変化は、不定形化・粗雑化・小型化である。しかし、よくみると土器埋設はほとんど変化せず、法量の変わらない深鉢形土器が、住居のほぼ中央に埋設され続ける。火気を受けた痕跡は土器埋設部と石組部の一部に認められ、前庭部には全く無い。変遷から機能を理解しようとする際、次の 2 点が重要であると考える。①火気を用いた土器埋設部は形状と位置を変えないので対し、石組部と前庭部、特に前庭部が姿を変えている。②大

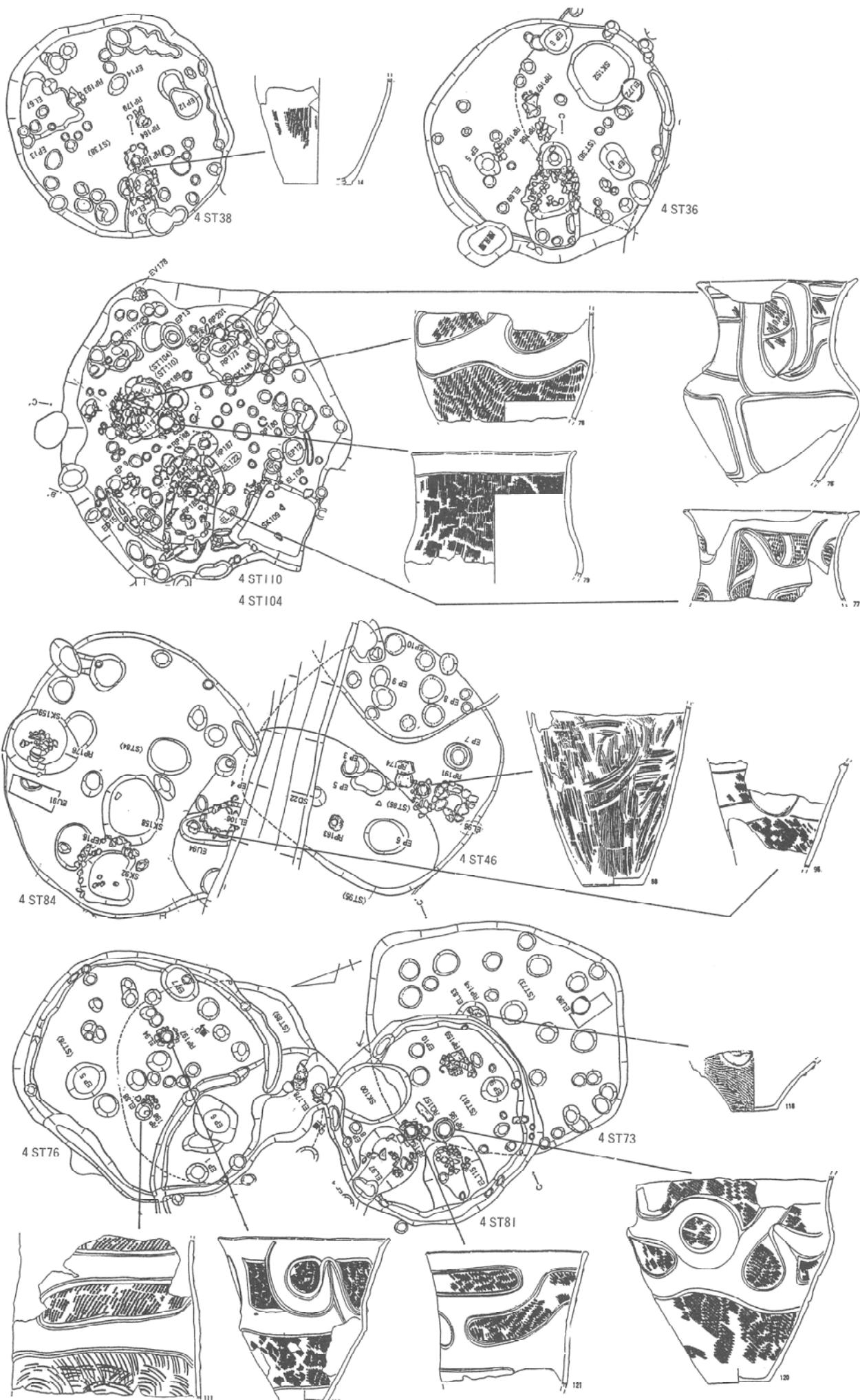
木10式期古段階は大木9式新段階から引き続き石組部と前庭部が精緻に作られている。以上の2点について、今後は他遺跡・他地域との比較のなかで検討して行きたい。

《主な参考文献》

- 梅宮 茂 1974 「複式炉文化論」『福島考古』第15号
丹羽 茂 1974 「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』第15号
山形県教育委員会 1979 『熊ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第16集
山形県教育委員会 1979 『山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
山形県教育委員会 1985 『山形西高敷地内遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第91集
財団法人最上義光歴史館 1990 『山形県城郭古絵図展図録』
山形県教育委員会 1992 『山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
山形県教育委員会 1992 『山形西高敷地内遺跡第5次調査説明資料』



遺構 S = 1 : 120 埋設土器 S = 1 : 8 第18図 複式炉の変遷図(1)



新段階

第19図 複式炉の変遷図(2)